二〇二三年度、初めての月曜朝礼で、子どもたちに次のようなお話をいたしました。

九日の日曜日は「イースター」でした。教会でイースターのお祝いをした人はいますか。立教小学校のイースター礼拝は、十四日の金曜日に行います。楽しみにしていてください。

十四日と言えば、今から百十一年前の四月十四日から十五日にかけて、四本煙突の豪華な客船が、イギリスのサウサンプトンからアメリカのニューヨークに向かう途中、氷山にぶつかり沈没しました。もう船の名前に気がついた人もいますね。そう、タイタニック号です。タイタニック号にまつわる興味深いお話は沢山あります。たとえば、タイタニック号の四本煙突のうち、一番後ろの一本はダミー（偽物）だったという話。

当時は、船のエンジンひとつに対して一本の煙突を立てていました。ですから、四本の煙突は一般的にはエンジンが四つあるということを意味し、速い船というイメージが強くなります。実際のタイタニック号のエンジンは三基。スクリューも三つ。最後尾の一本は、見栄えをよくするためのダミーで、当然煙は出ません。船の底の方に新鮮な空気を供給するために使われていたようです。

次は楽団員の話。タイタニック号には曲を演奏する楽団員たちも乗っていました。その人たちは、一等客室の人たちがリクエストできるようにと配られていた楽曲集の、三百曲以上の曲をすべて暗譜していたのだとか。

そのほか、一等客室向けの超豪華な大階段を含め、船内には階段が二十五か所も付いていたという話もあります。極め付きは、タイタニック号が遭難する十四年前に、モーガン＝ロバートソンという人が書いた小説に出てくる船が、イギリス船籍でスクリューの数が三つ。事故があった月が四月で、事故の原因は氷山との衝突。その小説に出てくる船の名がなんと、「タイタン号！」。似ている。あまりにも似すぎているというので、タイタニック号の事故後、大騒ぎになったようです。

また、タイタニック号というと、「ＳＯＳ」という遭難信号を最初に使った船だと言われることがあるようですが、その頃マルコーニ社というイギリスの会社が使っていた遭難信号は「ＣＱＤ」。遭難したので助けてほしいという意味です。

タイタニック号もマルコーニ社の電信の機械を使っていたので、最初は「ＣＱＤ」を発信し、その後で、当時世界的に認められつつあった「ＳＯＳ」という遭難信号も発信したようです。ですから、厳密に言うなら、マルコーニ社の機械を使っていた船で、最初に「ＳＯＳ」を発信したのがタイタニック号だったというのが、正しいようです。

この「ＳＯＳ」も一九九九年に廃止されました。大人で、「ＳＯＳ」の意味を知らない人は恐らくいないだろうと思いますが、君たちはどうですか？

クラス替えがあって、担任が替わったという人。四年生のように、クラスの子どもたちは持ち上がりで、担任の先生が替わったという人。六年生のように、クラスの子どもたちも担任も持ち上がりという人もいますね。

仲のよかった友達と離れ、担任も替わり、不安だ。「今までのクラスのお友達や先生の方が良かった。寂しい！」なんて感じている人がいても当然です。お友達や担任の先生、専科の先生、路線別の先生に遠慮なく、「ＳＯＳ」を発信してください。

クラスが持ち上がりで、先生が替わった。今まで引きずっている人間関係で辛いことが実はある、なんていう人も我慢せず「ＳＯＳ」。

そもそも、一年間以上付き合ってきた友達や先生と、ここ数日付き合い始めたばかりの友達や先生とを、比べること自体に無理があることなのですが、そんな気持ちになるということは十分理解できます。そうかと言って、過去に戻る訳には行かないし、これからの未来は自分たちで、どのようにでもデザインできます。「ＳＯＳ」を早めに発信して、先生たちやご家族の方たちから、ヒントを頂くといいですよ。（立教小学校校長　田代　正行）